

いかにして共に生きるか —— 「食べること」と「リズム」について

星野 太 (東京大学大学院総合文化研究科准教授 / 美学・表象文化論)

概要

いかにして共に生きるか。これは、フランスの批評家ロラン・バルト (1915-1980) が晩年に取り組んだテーマの一つであった。バルトはこの「共生」をめぐる書物を上梓する前に急逝したが、本講義では、残された講義ノートと録音データをもとに、そこからいくつかの問いを引き出すことを試みたい。とりわけ、バルトが用いている「イディオリトミー」という謎めいた概念に着目し、おもに「食べること」と「リズム」について考察する。

0. 導入——拙稿「食客論」

1. ロラン・バルト『いかにして共に生きるか』

半世紀前の「オンライン授業」 / 共に生きるということ / 死によって中断された思想

2. 共生のリズム——「イディオリトミー」とは何か

イディオリトミックな共同体 / ラカリエール『ギリシアの夏』 / アトス山の修道院

3. 「食べること」をめぐる——孤食と共食のあいだ

ブリア=サヴァラン『美味礼讃』 / 藤原辰史『緑食論』 / レストランという場

0. 導入

- ・ 拙稿「食客論」 (『群像』 [講談社] で 2021 年より連載中)

共生社会論としての「食客論 (parasitology)」の試み——「共生」から「寄生」へ

ロラン・バルト、ブリア=サヴァラン、シャルル・フーリエ、キケロ、カール・シュミットなど

- ・ 「共生」という言葉に対する批判意識——「誰が (何が)」、「誰と (何と)」、共生するのか？
- ・ ひろく普及し、人口に膾炙した言葉がもたらす批判意識の欠如——「SDGs」などもその一例
- ・ 配布資料①：拙稿「食客論——①共生」 (『群像』 2021 年 5 月号、314-315 頁)

1. ロラン・バルト『いかにして共に生きるか』

- **ロラン・バルト**——20 世紀フランスを代表する批評家、記号学者。1915 年、フランスのシェルブールに生まれ、パリ大学で古典ギリシア文学を学ぶ。最初の著書である『エクリチュールの零度』（1953）が好評を博し、その後も『神話作用』（1957）や『モードの体系』（1967）をはじめとする多くの著作を通じて文学・美術・広告などを分析した。日本について論じた『表徴の帝国』（1970）も有名。高等研究実習院教授を経て、1977 年よりコレージュ・ド・フランス教授。1980 年、交通事故で逝去（*ローラン・ビネのミステリー小説『言語の七番目の機能』〔高橋啓訳、東京創元社、2020 年〕はこの交通事故を題材にしている）。
- ・ 半世紀前の「オンライン授業」
- **バルトのコレージュ・ド・フランス講義「いかにして共に生きるか」**は、1977 年の 1 月 12 日から 5 月 4 日までの水曜日に 1 時間ずつ、計 14 回にわたり行なわれた。コレージュ・ド・フランスは大学などとは異なり、いわゆる学位の授与を目的とした教育機関ではない。その講義は万人に開放されており、基本的にだれでも聴講することができる。
- 講義録の序文を書いたクロード・コストによれば、この当代随一の批評家の講義をじかに聞こうと、教室にはおびただしい数の聴衆が詰めかけたという。そのため、別室に同時中継するための機器が用意されるなど、当時としては例外的ないくつかの対策も講じられた。しかし今日ならばともかく、なにぶん 1970 年代半ばのことである。肝腎の音響機器にトラブルもあり、講義の環境は理想的なものにはほど遠かった。このトラブルの様子は、前出の講義ノートとあわせて 2002 年に発売された、同講義の CD-ROM で確認することができる。
- ・ 共に生きるということ
- バルトは「いかにして共に生きるか」をめぐる問いを、その社会的な諸形態——たとえば「家族」や「カップル」など——に即して考えるのではなく、むしろ個人の自由を阻害しないような、ごく限られた集団による共同生活を通じて考えようとした。それにあたってバルトが導入したのが「イディオリトミー」といういささか耳慣れない言葉だった。
- ・ 死によって中絶された思想
- バルトはこの講義の 3 年後、1980 年にパリ市内で起こった交通事故がきっかけでこの世を去っている。そのため当の講義の内容が、生前なんらかの仕事にまとめられることはなかった。

- ・ 「共生 (co-existence)」ではなく「いかにして共に生きるか (comment vivre ensemble)」
- ・ その問いに応答するためのさまざまなトポス——その最たるものとしての、アトス山の修道院

2. 共生のリズム——「イディオリトミー」とは何か

- ・ イディオリトミックな共同体の方へ
- 「イディオリトミー (idiorythmie)」とは、ギリシア語の「イディオス (自分の)」と「リュトモス (流れ、リズム)」からなる合成語である。このギリシア語の原義が示唆するように、これは「自分に固有のリズム」を意味する。
- ・ ラカリエール『ギリシアの夏』
- バルトは講義のなかで、ジャック・ラカリエール『ギリシアの夏』(1976)の参照をうながしている。日本ではほとんど知られていないこの著者は、1925 年にリモージュに生まれ、2005 年にパリに没した在野の作家である。なかでも、およそ 20 年にわたるギリシア旅行の経験にもとづいて書かれた『ギリシアの夏』は、当時のフランスの読書界にも好評をもって迎えられた。
- ・ アトス山の修道院
- そのラカリエールの本に登場する「イディオリトミー」という言葉は、ギリシアのアトス山に存在する修道士たちの特殊な生活形態を指している。いまなお、東方正教会の中心地として(あるいは世界遺産として)知られるこの山には、修道院に属しながら各々のリズムで生活する者たちの共同体があるという。イディオリトミーとは、その修道士たちに許された「理想的なリズム」のことであった。

この〈聖なる山〉は、ある特殊な生活様式を生み出した。それが、ここでイディオリトミーとよぶものである。アトス山の修道院は、実のところ二つの異なるタイプに分かれる。共住的、あるいは共同体的といわれる修道院では、食事であれ、典礼であれ、作業であれ、いっさいは共同で行なわれる。いっぽう、ここでイディオリトミックとよぶ修道院では、各々が文字通り個人のリズムで生活する。修道士たちはそれぞれが個室をもち、(毎年恒例の祝典を除けば)自室で食事をし、修道院にやってきたときに持っていた所持品をそのまま持つことが許されるのである。[Lacarière (1976) : 40]

- ・ 目的を同じくする者たちが、各々のリズムで共同生活を送るという「ユートピア」
- ・ ひるがえって、具体的現実のなかに存在する「共生の耐え難いイメージ」について語るバルト
- ・ 配布資料②：バルト「1977 年 1 月 12 日の講義」(『いかにしてともに生きるか』邦訳、9 頁)

ファンタズム

幻想はその合理的、論理的な反対物を持ちません。しかしながら、幻想そのもののなかには、対抗イメージ、あるいは否定的な幻想とでもいったものがあります。[……] 個人的な例を挙げましょう。〈共生〉の耐えがたいイメージ、わたしにとってそれは、レストランで隣の席に座っている感じの悪い連中とともに、永遠に閉じ込められることなのです。[Barthes (2002) : CR-ROM]

3. 「食べること」をめぐる——孤食と共食のあいだ

- ・ ブリア = サヴァラン 『味覚の生理学』 (邦訳: 『美味礼讃』)
- ジャン・アンテルム・ブリア = サヴァラン——1755 年 4 月 1 日、スイス国境付近の小都市ベレーに生まれる。ディジョンの大学で法学を修めたのち、故郷に戻り弁護士となるが、フランス革命のおりに三部会の代議士としてパリに派遣されるや、ジャコバン派から王党派とみなされ、にわかに立場を危うくする。そのため、1793 年にはスイスを経由してアメリカに亡命。その 3 年後には総裁政府の成立を機にフランスに戻り、その後はパリの破毀院の判事として終生奉職した。『味覚の生理学』はこの法律家の最晩年の著書であり、ブリア = サヴァランがこの世を去る 2 ヶ月前に匿名で出版された。

- ・ 藤原辰史 『縁食論』

孤食は評判が悪い。しかし、親友たちと食べることに負けないくらい楽しいこともあるし、気が楽なときだってある。この批判用語には、どこか「家族絶対主義」の匂いがしなくもない。家族絶対主義とは私の造語だが、家族の崩壊が世の中の崩壊の最大の原因である、家族の幸福が世の中の幸福の中心にある、という近代市民社会でよくお目にかかる考え方のことだ。[藤原 (2020) : 10]

[……] 私たちはしばしば孤食を克服する概念として共食を置いてきた。しかし、あまりにも私たちは共食に期待をかけすぎていないだろうか。こころとからだに痛みを覚えながら、それでもひとりぼっちで食べざるをえない子どもたちに居場所を与えるヴィジョンとして、あまりにも一家団欒というイメージに拘泥しすぎてこなかっただろうか。[藤原 (2020) : 18]

- ・ レストランという場
- 『味覚の生理学』には「レストラン」について書かれた章がある。それによれば、レストランとは「いつでも出せるように用意したごちそうを、一般大衆に提供する」商売のことであり、それらは「客の求めに応じて、一人前ずつ定価で分売される」。今日からすればあまりに当然とみえるこのような定義は、1825 年のパリにおいて、いまだこれが新しい商形態であったことの何よりの証しである。では、このレストランという業態はいったいどのような次第で登場したのか。ブリア = サヴァランの説明はおおよそ次のようなものである。

- 時は 1770 年前後、太陽王ルイ 14 世の治世が終わり、革命を間近に控えていたこの時代、パリに来る外国人が食事でありつく方法はごく限られていた。知られるように、このころ旅行者の食事はホテルで提供されるのが常であったが、それらは総じてひどいものだった (と著者はいう)。当時、パリでまともな食事でありつくには、同地の親切な友人の招待を受けるよりほかなかった。こうした状況をくつがえすべく、「美味しいものを速やかに、かつ清潔に」提供することを考えた最初の人物こそ、パリではじめての料理店主となった——これが、ブリア=サヴァランによる「レストラン」のおおよその解説である。
- このレストランというシステムは、『味覚の生理学』における「料理の哲学史」(第 27 省察)の「最後の完成」とみなされている。いまではごく当たり前の光景になってしまったが、好きな時間に、それなりに自分の好みに応じた食事がとれるというのは、それまでお抱えの料理人をもつ一部の人々にのみ許された、ごく例外的な特権にほかならなかった。
- 他方、ブリア=サヴァランは、レストランの出現がもたらした弊害についても、いくばくかのことを書き残している。まず容易に想像されることとして、レストランでの食事に味をしめ、そこに足しげく通うようになった人々のなかには、おのれの財布に分不相応な出費をしてしまう者がいた。さらには豊富な料理を前にして、おのれの胃袋の限界を知らず食べすぎてしまう者もいた。しかし、それよりもさらに深刻なことがある、とこの美食家は言う。

しかし、これらのことよりもはるかに社会秩序にとって有害なのは、ひとりでの食事が利己主義を助長することである。というのもそのために、周囲のことなどお構いなしに、自分のことだけ考える、配慮を欠いた人間がしばしば散見されるのである。われわれの日々のつきあいのなかでも、食事の前、その最中、あるいはその後の態度をみれば、会食者のなかで日頃からレストランに出入りしている人間は、すぐにそれとわかるものである。[Brillat-Savarin (1826) : tome II, 136]

- ここで槍玉に挙げられているのは、レストランで「ひとりで」食事をする習慣を身につけた人物にほかならない。それによれば、ひとりで食事をする習慣は利己主義^{エゴイズム}を助長し、自分のことしか考えず、周囲に配慮を欠いた人間を生み出すおそれがある。いずれにせよ注意したいのは、『味覚の生理学』において、ひとりですること——いわゆる**個食/孤食**——が、露骨な批判の対象となっていることだ。表むきは「生理学」を謳っているものの、同書において食事はあくまで社会的行為に属するものであり、ゆえにひとりですることは「利己主義を助長」するものとして非難されるのである。

- ・ バルトによる『味覚の生理学』への微妙な評価——「孤食」批判をはじめとする狭隘な姿勢
- ・ ブリア=サヴァランの『味覚の生理学』の背後に透かし見える家族・異性愛・人間中心主義
- ・ ほかに人々と空間を共にすること——孤立とも団結とも異なる「つかの間の共同体」として
- ・ あるいは、大小さまざまな生物が交差する場としての、飲食の場面(生態学的な^{エコロジカル}飲食の思想)

引用・参考文献

- Barthes, Roland, *Comment vivre ensemble. Cours et séminaires au Collège de France (1976-1977)*, Paris, Seuil, 2002. (『ロラン・バルト講義集成 1 いかにしてともに生きるか——コレージュ・ド・フランス講義 1976-1977 年度』野崎歓訳、筑摩書房、2006 年)
- Brillat-Savarin, *Physiologie du goût, ou Méditations de gastronomie transcendante*, Paris, Satelet, 1826. (『美味礼讃』関根秀雄・戸部松実訳、岩波文庫、1967 年／玉村豊男訳、中公文庫、2021 年)
- Brillat-Savarin, *Physiologie du goût avec une Lecture de Roland Barthes*, Paris, Hermann, 1975. (ロラン・バルト／ブリヤ＝サヴァラン『バルト、〈味覚の生理学〉を読む 付・ブリヤ＝サヴァラン抄』松島征訳、みすず書房、1985 年)
- Coste, Claude, « Préface », in Roland Barthes, *Comment vivre ensemble. Cours et séminaires au Collège de France (1976-1977)*, Paris, Seuil, 2002.
- Lacarrière, Jacques, *L'Été grec. Une Grèce quotidienne de 4000 ans*, Paris, Plon, 1976.
- Marty, Éric, « Avant-propos », in Roland Barthes, *Comment vivre ensemble. Cours et séminaires au Collège de France (1976-1977)*, Paris, Seuil, 2002.
- 桑田光平『ロラン・バルト——偶発事へのまなざし』水声社、2011 年。
- 藤原辰史『縁食論——孤食と共食のあいだ』ミシマ社、2020 年。